

# ホトトギス・ウグイスの語形と鳴き声の音形\*

橋本 修†

**【要旨】** 実験が日本語史研究に貢献できる可能性を持つ一例として、「ホトトギス・ウグイスの語形（言語音形）は現在の形よりも遡及形のほうが、鳴き声の音形に相対的に似ていると言うことができ、これが、この2語が鳴き声を起源としている（写音語である）ことの証拠になるのではないか」ということを論じる。

遡及形のほうが相対的に鳴き声に似ていると見なされる具体的な第一点はアクセントで、鳴き声音形における最もピッチの高い部分に、遡及形の高アクセント部（原則1モーラ）が対応する、という形をとる。文献や現代のアンケート調査により、母語話者の「ホトトギス・ウグイスの語形が鳴き声を写したものである」という意識は上代・中古のほうが強く、現在では低い可能性が高いが、これは現在に至る過程でアクセント変化が起こり、高アクセント部の位置と鳴き声の高い分節の位置が対応しなくなったためと考えることが可能である。また、鳴き声音の最も高い分節に対応するモーラだけがacuteな母音で現れるのも写音語説を補強する現象である。

**キーワード：** 写音語・写音語の原音声との類似度・語源研究・鳥名

## 1. はじめに

史的研究に実験を適用することには困難がつきまとう。基本的に過去の言語のありようについて直接実験をすることはできないし、普通の意味で言われる「言語変化」は異なる複数話者間の差としてしかとらえられず、過去の言語変化そのものを、普通の意味での実験によって直接とらえることは非常に難しい。

しかしながら、現代語におけるよりは推測を含むことにはなるが、実験の結果が日本語史研究に対する傍証となることがある。たとえば本稿が挙げる以下のような例がそれにあたる。実験言語学会創設にあたり、具体例を検討することにより、実験的手法が日本語史研究に援用できる可能性について論じたい。

論述の展開上もってここに要旨を繰り返すが、本稿の主な主張は、実験（実験音声学）が日本語史研究に貢献できる可能性を持つ一例として、「ホトトギス・ウグイスの語形（言語音形）は現在の形よりも遡及形のほうが、鳴き声の

\* 本稿は2008年8月29日に行われた、日本実験言語学会創立記念大会シンポジウムでのトークに加筆修正したものである。席上有益なコメントを下された会長・パネリストのかたがた、終了後にコメントくださったかたがたに感謝申し上げる。コメントを受けて内容の一部を修正したが、当然ながら本稿の誤りはすべて筆者に帰する。

† 筑波大学大学院人文社会科学研究所

音形に相対的に似ているが、これはこの2語が鳴き声を起源としていることの証拠になるのではないか」ということである。従来からこれらの鳥名はその鳴き声を写した写音語ではないかという言説は見られるが、いわば素朴な直感が語られているままの状況であり、本稿では、原音声の音形（との類似）等をアクセント・母音など要素に還元しながら具体的に見ることによって、これまでより少しはその説の蓋然性を高めうるのではないかと考えている。

## 2. ホトトギス・ウグイスの語源説・語源意識<sup>1</sup>

### 2.1. 辞書ほかにおける語源記述

ホトトギス・ウグイスという語形が鳴き声を起源にしている、という語源説自体は珍しいものではない。ホトトギスについては和句解(17c中頃)、東雅(18c前半)・箋注和名類聚抄(19c前半)、ウグイスについては言元梯(19c前半)・箋注和名類聚抄などに鳴き声起源の説が挙げられている(ほか、山口(1989)など参照)。文献に記される語源説自体は、たとえば現代において質問紙法によって計測される語源意識<sup>†</sup>とは異なり、とにかく何か語源を付けなければならないという意識からひねりだされるケースも多く、文献成立時の日本語母語話者の多数が、そのような語源意識を持っていたということの証拠にはならない。むしろ逆に、積極的に語源説が語られるということは、その語の語源がはっきりしない状況に置かれていることを意味している、と言われることさえある。

### 2.2 語源意識を背景にした和歌

ある時点での、個人的でない語源意識を垣間見ることのできる情報はないのであろうか。小松(1985)、山口(1989)ほかに挙げられているように、以下の歌は、歌が詠まれた時点において、鳴き声が起源であるという語源意識が個人的なものではないことを、ある程度示していると考えられる。

- (1) 暁に名のりなくなるほととぎすいやめづらしくおもほゆるかも  
万葉集 巻18 4084番歌(8c中頃) 大伴家持  
(暁の時分に名を名乗って鳴くほととぎすのように、あなたが大変なつかしく思われます)
- (2) こころからはなのしづくにそほちつつうくひずとのみ鳥の鳴くらん  
古今和歌集 422番歌(9c後半～10c前半) 藤原敏行  
(自分から進んで花のしづくにぬれていながら、どうして「憂く干ず(憂鬱なことに乾かない)」とばかりその鳥は鳴いているのだろう。)
- (3) いかなれば春来るからにうぐいすのおのれが名をば人に告ぐらん

<sup>1</sup> 本稿において、厳密には「語源意識」という用語の適切性には問題がある。本稿の事例で言えば、例えば「ホトトギスという語(の語形)が鳴き声を写しているものである」という意識と、「ホトトギスという語が(現在とはもかく)鳴き声を起源にしている」という意識とは理論上は分けることができ、「語源意識」という語を厳密・狭義にとれば、それに当たるのは後者のほうだけ、ということになる。しかし本稿は、本稿のケースでは母語話者集団における上記2つの意識を区別することが困難であり、また前者にあたる適切な用語がないことから、両者を区別せず、どちらも「語源意識」と呼ぶ。

承歴 2 年内裏歌合(11c 後半) 美作守匡房  
 (どういうわけで、春が来るとすぐにうぐいすが自分の名を人に告げるの  
 だろう)

表記・現代語訳は諸注釈を参考にしている。これらの歌からは、最も素直に考えればそれぞれ「ホトトギスは‘ホトトギス’、ウグイスは‘ウグイス’と鳴くものだ」という意識が多く読者にあり、それを踏まえて解釈するものだ、という含意が見てとれる。単語の語源を集めた文献の記載に「多くの人は気がつかないかもしれないが、実はこういう語源である」という含みが往々にしてあるのとは異なっており、これらの歌の存在は、(程度について幅はあるだろうが)一つの語源意識が一定程度の母語話者に共有されていた可能性を示す有意な情報であると考えられる。

### 2.3. 現在の語源意識

現代語における、ホトトギス・ウグイスという語形に対する語源意識はどのようであろうか。結論的には、「名前が鳴き声を映したものである」という意識は、ウグイスについては極めて少なく、ホトトギスについてもあまり高くない、と推測される。筆者の 1992 年における以下の簡略な調査(インフォーマント数 234 名(学部大学生))において、

質問：以下の生物名(生き物の名前)それぞれに、鳴き声を映している名前だと思ふものに○、そうでないと思ふものに×をつけてください。

表 1 : 回答結果

|       | ○   | ×   | その他(無回答、「微妙」など) |
|-------|-----|-----|-----------------|
| ネコ    | 44  | 181 | 9               |
| サル    | 1   | 222 | 11              |
| カッコウ  | 223 | 5   | 6               |
| キンギョ  | 2   | 229 | 3               |
| ホトトギス | 83  | 131 | 20              |
| ウグイス  | 31  | 192 | 11              |

という結果を得ている。多い少ないを表現する言い方にもよるが、「うぐいす」について言えば、鳴き声を映したものであるとみる回答 31 は「ねこ」の 44 より少ない(「その他」の回答を除いて「ネコ」の行と「ウグイス」の行を比べた場合、カイ 2 乗検定(5%水準)で有意差を検出できないので同程度という言い方もありうる)。ホトトギスについてはある程度多いともいえるが、カッコウと比べれば相当の差である。物言いが荒いということも認めた上で、ひとまず現代語においては、ウグイスについてはほぼなく、ホトトギスについても若干にとどまる、と見ておきたい。

### 3. ホトトギス・ウグイスの音形

#### 3.1. 現在の音形と遡及形概観

次に、ホトトギス・ウグイスの、現在の音形・遡及音形（遡れる範囲で最も古い音形）を確認しておく。現在の音形は

ホトトギスの現在の音形：[ ho to to gi su ]

京阪アクセント[高高低低] 標準語アクセント[低高高低]

ウグイスの現在の音形：[ u gu i su ]

京阪アクセント[高低低低] 標準語アクセント[低高高低]

と、大まかにはみなしてよいであろう（厳密な音声表記によっていないことをお詫びするが、本稿の趣旨には直接影響がないものとする）。遡及形アクセントを推定する地域が奈良・京都周辺であるため、京阪アクセントを先に示してある。京阪アクセントは秋永(1997)記載の(現代)京都アクセントで代表させる。

遡及音形の推定音価は主として森(1991)による、上代語音の推定によっておく。ただしアクセントについては、上代における当該語のアクセントを直接示す資料は見つかっていない。当該語については最古のアクセント資料が平安末期のものであり、高山(1981)・森(1991)等による「上代語アクセントは中古と大差なかったであろうと推定される」という主張を受け、実際の資料は和名類聚抄・類聚名義抄等の、平安時代末期のアクセント資料によっている（タイムラグは大きい、高山(1981)・森(1991)の検討は具体的かつ穏当なものである）。先行研究による子音等についての音価推定には一定の幅で見解の相違があるが、本稿の議論ではその差は決定的な問題にならない。母音の甲乙についても、本稿の問題に対しては影響がないと見なしておく（ちなみにホトトギスは「ホト<sub>乙</sub>ト<sub>乙</sub>ギ<sub>甲</sub>ス」、ウグイスは「ウグヒ<sub>甲</sub>ス」。）

ホトトギスの遡及音形：[ po to to gi su ]

アクセント[低低低高低]

ウグイスの遡及音形：[ u gu pi su ]

アクセント[低低高低]

遡及形アクセントの推定においては、ホトトギスについて、観智院本類聚名義抄において[低低高高低]のアクセント記号（[平平上上平]の声点）が付されていることが若干問題である。しかし同時代・近い時代のアクセントを反映すると見られる鎮国守国神社本類聚名義抄・京本和名類聚抄・前田本和名類聚抄・伊勢十巻本和名類聚抄・伊勢二十巻本和名類聚抄において[低低低高低]となっているので、[低低低高低]としておいてよいと思われる（鎮国守国神社本類聚名義抄については影印本である尾崎(1965)を見ると、筆者の目では[低低低高低]であるとはっきり判読しがたいが、熟達者である望月(1974)の判定は[低低低高低]であるのでこれに従う）。観智院本類聚名義抄における[低低高高低]という記載についての問題が完全に解決するわけではないが、遡及形を[低低低高低]

とみておくことについては、常識的に問題はないと判断する（ちなみに日本国語大辞典のホトトギスの平安時代アクセントについての記載も[低低低高低]であり、観智院本類聚名義抄の記載をひとまず脇に置いていることが伺える）。

ウグイスの遡及形については、平安末期からその周辺にかけてのアクセントを示す資料の中に、[低低高低]以外の示され方をしているものは見いだせず、声点の見られる鎮国守国神社本類聚名義抄・京本和名類聚抄・前田本和名類聚抄・伊勢十卷本和名類聚抄・伊勢二十卷本和名類聚抄で[低低高低]であり、複合語まで範囲を広げれば図書寮本類聚名義抄にも[低低高低]の表記がある。

このようにして推定された遡及形では、ホトトギスが第4モーラ、ウグイスが第3モーラのみが高アクセントである。本稿の第一の指摘は、上記の遡及形アクセントの姿と、以下の3.2節におけるそれぞれの鳴き声の音形を比べると、鳴き声のピッチの最も高い位置がそれぞれ末端ではない後半部にあり、語のアクセントの高いモーラが、鳴き声の最も高い位置に対応しているのではないか、それがあつた時期にアクセント変化を起こし、対応が損なわれたために写音語らしさが損なわれたと考えることができるのではないか、ということである。

### 3.2. 鳴き声の波形と遡及語形との対応・類似

鳴き声の波形を以下に示す。音源の権利関係や本稿筆者の技術の未熟さで図版が不十分な部分があり申し訳ないが、本稿の趣旨には影響がないと考えておく。波形の下位置に記しているカナ表記が本稿筆者の推定する、鳴き声に対応するモーラの概略的位置である。図1の縦軸は1目盛りが約2kHzと推定されるが正確な値は不明である。図2は、百瀬(1986)の140頁における図11-1である。ホトトギス・ウグイスの鳴き声は1種類ではなく、特にウグイスについては型として認められているだけでも数種類が知られているが、ここでは最も典型的とみられる型（百瀬(1986)におけるH型、いわゆるホーホケキョと聞きなされるタイプ）を当該のものとみなしている。

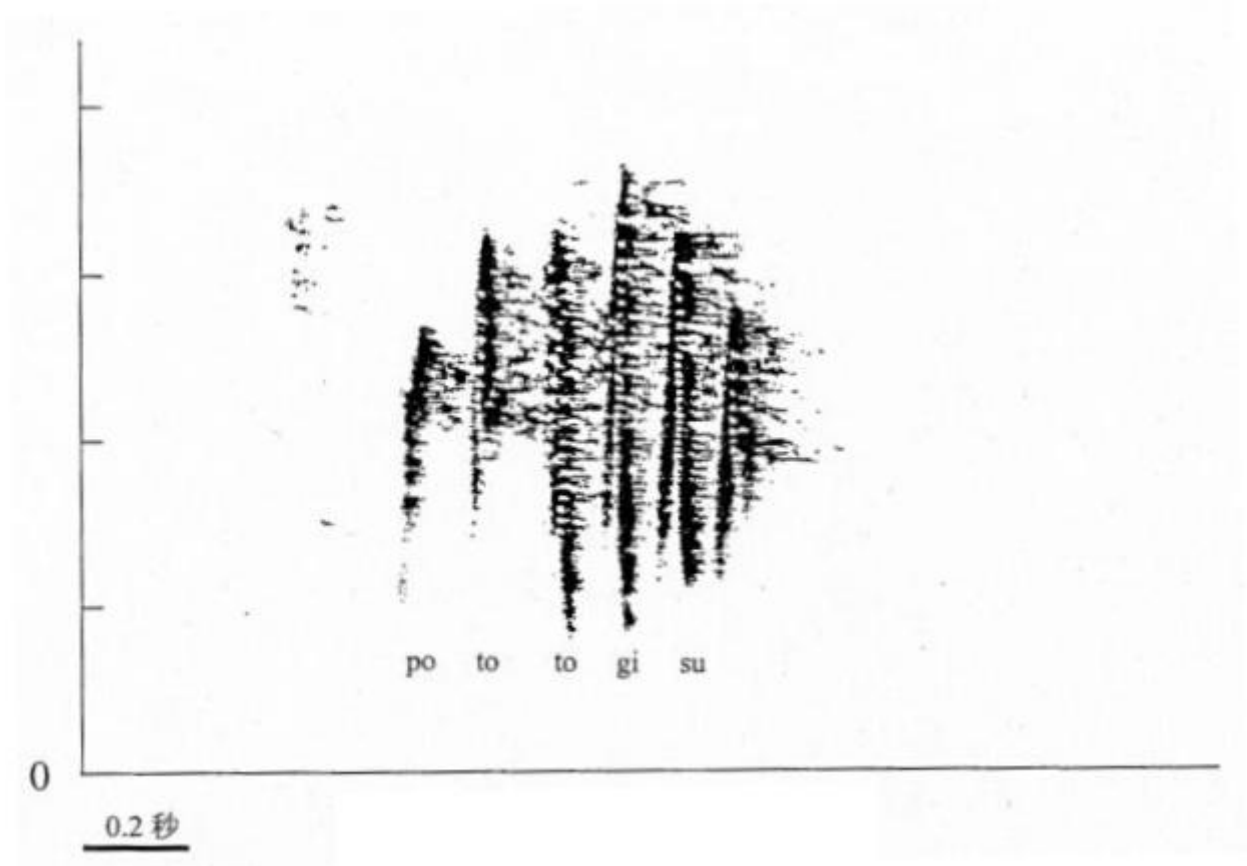


図 1 ホトトギスの鳴き声

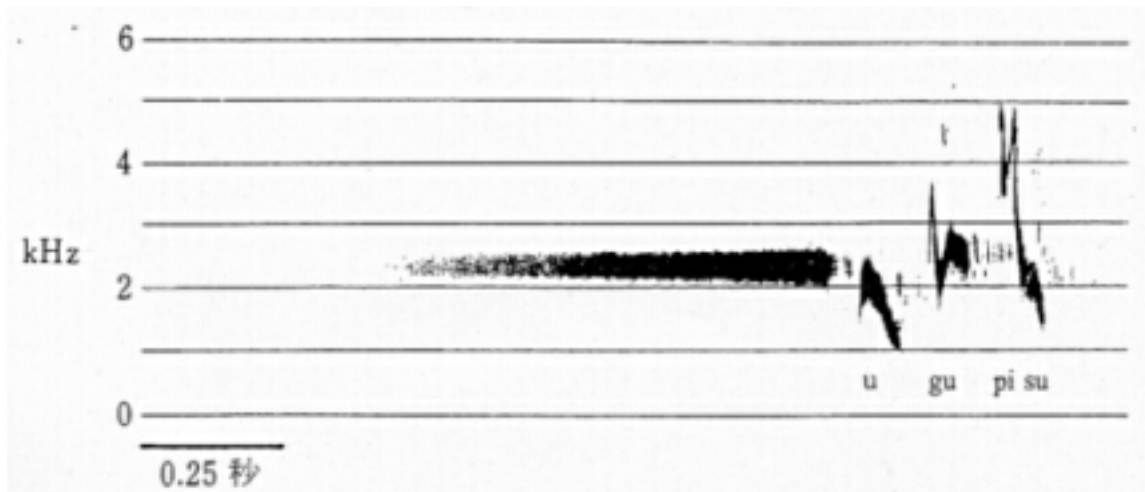


図 2 百瀬(1986)によるウグイスの鳴き声

それぞれの鳥の鳴き声がどのように分節されている（と日本語母語話者に知覚されている）かの判断については揺れもあろうが、ある程度本稿と異なる分

節の認定をしたとしても、ピッチのピークが、終端ではない後半にあるという形をしているという意味で、ホトトギス・ウグイスの、現在のアクセントよりは遡及形のアクセントのほうが、鳴き声の音声に似たアクセント配置になっている、ということは動かないのではないだろうか。

2. でみた語源意識とのかかわりでいえば、非常に大まかにではあるが、ホトトギス・ウグイスが鳴き声を映したものであるという語源意識は、上代～中古においては高く、現在においては低いと見なせるわけで、その語源意識の差は、「ホトトギス[低低低高低]」「ウグイス[低低高低]」→「ホトトギス[高高低低低/低高高低低]」「ウグイス[低高低低/高低低低]」というアクセントの変化に対応していると言えるのではないだろうか（変化の中間段階のありようと、それが語源意識の変化とどのように対応するかについては未詳）。

### 3.3. アクセント以外の情報

このように、ホトトギス・ウグイスという語の遡及形アクセントは、その鳥の鳴き声の高低を、最も高い位置を中心に、模式的に反映しているのではないか、という推定が、少なくとも一応は可能になる。そしてその推定を、さらに期待の持てるものにしてくれるのが、語形の母音配列である。日本語の母音を acute-grave の対立で並べればおおむね、

acute ← [i][e][a][o][u] → grave

ということになるだろうが、ホトトギス・ウグイスともに、アクセントの高の部分に acute な母音のモーラ（ホトトギスの gi、ウグイスの pi）が対応しており、それ以外の、低アクセント部には、一律に grave な母音 u・o を持つモーラしか現れない。類例を多数拾えるわけではないので量的な検証は難しいが、このような母音の配列（とアクセント・原音声との一致）が偶然のものとは筆者には思われないのであるが、いかがであろうか。類例がたくさん見つからないのは、母音の acute-grave がきれいに実際の音の高低を反映するには、全体の音色が均一に近いものでなければならぬ、という当然の制約があるためであろう。ホトトギス・ウグイスの鳴き声は比較的純音に近いと言われるが、開始から終了まで音色に大きな変化がない（主に変化するのは高さ・強さ等）ということが、この2語の明確な母音配列を作り出しているということである。したがって類例としては、少ないながらも、均質的な電子音を写したと思われる「ピッポッパ」・「(救急車などの)ピーポー」(いずれも pi の部分が元の音声の一番高いところに対応)などが挙げられる、ということではないだろうか。このほか、適用の拡張しすぎの危険をどこまで考えるかが難しいが、いわゆる「聞きなし」の類（ニワトリの「コケコッコー」、ウグイスの「ホーホケキョ」、トビの「ピーヒョロヒョロ」など）も、鳴き声の最も高い部分と acute な母音を持つモーラが対応しているように見える。

#### 4. おわりに

本稿の議論のもとになっているデータは量・質ともに改善の余地がある。また過去のありかたについて考える場合、「当時のホトトギス・ウグイスの鳴き声が現在のそれとほぼ同じであると見なす」「ホトトギス・ウグイスの鳴き声に方言差がない、あるいは無視できるほど小さいと見なす」等、諸種の微妙な「見なし」が付いて回り、推定の精度が悪いことは否めない（鳴き声の方言差については、少なくともウグイスについては存在がすでに知られている）。しかし、鳴き声の波形を実験的にとって観察してみるだけで、文献資料による推定遡及形アクセントや母音配列との対応が（少なくとも可能性としては）見て取れ、全くのあてずっぽうよりは、「鳴き声が起源である（元は鳴き声を映している語である）」ということの蓋然性を高めることができたと言える。今後高い技術やより精密な理論を持った研究者が、より精度の高い実験による日本語史研究を行ってくださればよいと思う。実験言語学会の発足に当たり、日本語史研究に実験的手法がより多く援用されるようになることも含め、諸事にわたる活動の発展を祈念申し上げる。

#### 【参考文献】

- 秋永一枝(1997)『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂  
 秋永一枝(1998)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂  
 尾崎知光(1965)『鎮国守国神社蔵本三宝類聚名義抄』未完国文資料刊行会  
 小沢正夫(1981)『古今和歌集』日本古典文学全集 小学館  
 沢瀉久孝(1957)『万葉集注釈』中央公論社  
 片桐洋一(1998)『古今和歌集全評釈』講談社  
 宮内庁書陵部所蔵(1976)『凶書寮本類聚名義抄 本文編』勉誠社  
 宮内庁書陵部所蔵(1976)『凶書寮本類聚名義抄 解説索引編』勉誠社  
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広(1975)『万葉集』日本古典文学全集 小学館  
 小松英雄(1985)「うめにうくひす」『文藝言語研究 言語編』10 筑波大学文芸・言語学系  
 高山倫明(1981)「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』51  
 天理図書館善本叢書และ書之部編集委員会(1976)『観智院本類聚名義抄』天理大学善本叢書และ書之部 天理大学出版部  
 松本治弥・加藤宏明(1993)「「バウワウ」か「ワンワン」か」『言語』22-6  
 馬淵和夫(1964)「和名類聚抄にほどこされた声点について」『国語と国文学』41-10  
 馬淵和夫(1973)『和名類聚抄古写本声点本本文及び総索引』風間書房  
 望月郁子(1974)『類聚名義抄四種声点付和訓集成』笠間書院  
 百瀬浩(1986)「音声コミュニケーションによるなわばりの維持機構」『鳥類の繁殖戦略(下)』東海大学出版会  
 百瀬浩(1987)「ウグイスの鳴き声の秘密」『野鳥』494  
 森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店  
 山口仲美(1989)『ちんちん千鳥の鳴く声は一日本人が聴いた鳥の声一』大修館書店



# On the Word Forms of the Birds “Hototogisu” and “Uguisu”

Osamu HASHIMOTO<sup>†</sup>

The oldest accent patterns of the avian names "hototogisu" and "uguisu" are presumed to be [LLLHL] and [LLHL] respectively and are associated with the pitch patterns of their songs. This fact shows objective evidence that these words are the onomatopoeic expressions which imitate their songs. Another fact that the H of their accent patterns correlates with an acute vowel [i] and the L with grave vowels [u] or [o] shows collateral evidence for the onomatopoeic hypothesis.

According to the past literature and recent questionnaire research, native speakers until the late Heian period had a clearer awareness that "hototogisu" and "uguisu" originated from the avian songs than present-day native speakers. The decreased awareness of their etymology seems to reflect the dissimilarity between the pitch patterns of the original songs and the accent patterns that changed from [LLLHL] and [LLHL] to [HHHLL or LHHLL] and [LHLL or HLLL] respectively.

<sup>†</sup> *Graduate School of Humanities and Social Sciences*  
*University of Tsukuba*  
*1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan*  
*E-mail: ohashimo@sakura.cc.tsukuba.ac.jp*